

淨

土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別換承認雜誌第三五二号）
昭和三十五年九月二十五日印刷 昭和三十五年十月一日發行

第二十六卷

第十号

十月号

吳大猷
天章



☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料八〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行
尚編集の都合で大変遅れました事をおわび申
上げます。

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料八円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都品川区上大崎一ノ七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二二八七番

浄土 十月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

御十夜の教え……………林 隆 碩……………(6)

薄地底下の人……………戸川 靈 俊……………(10)

青年と孝養……………(2)

合理的ということ……………藤 金 正……………(24)

あさくさ風土記……………一瀬 直行……………(16)

高僧伝 土川善激……………大橋 俊 雄……………(14)

重ねられたもの……………純 誉……………(9)

新編 百喻経(8)……………伊 東 孝 位……………(19)

——扉の御法話……………(12)——新刊紹介……………(26)

——童心仏心……………(18)——教学大会開催日定……………(32)

草木物語(1)……………合 田 徹 雪……………(20)

子供の怪我(上)……………村瀬 秀 雄……………(27)

浄土

十月号

出家は、わかきとおひたると、いづれか功德にて候。答。老ては功德ばかり之候。わかさはなほめでたく候。

法然上人御法語



青年と孝養

○

それは、仏陀が、竹林精舎におられた頃のことである。王舎城内に、シンガーラカという、富豪の子がすんでいた。

毎日、朝早く起き、郊外に出て、衣髪を濡らし、身をきよめてから、かならず、両手を会わせて、東・西・南・北、上・下の方向にむかってしずかに礼拝をしていた。

ある日、清らかにすんだ朝の郊外をあるいておられた仏陀は、ふと、そのかれの姿をこらんになった。

仏陀は、

「青年よ、汝は何故、毎朝早くおきて、諸方を拝んでいるのか」

「世尊よ、わたくしの父が亡くなりますとき、わたくしに諸方を拝むようすすめました。わたくしは、

その遺志にしたがい諸方を礼拝しています。」

「青年よ、そのようにして、六方を拝むべきではない」

「世尊よ、しからばどのようにして拝むべきでしょうか」

青年シンガーラカのすんだまなざしを、慈愛おかくみつめておられた仏陀は、しずかにさとすがごとく、つぎのように説かれた。

○

「青年よ、仏陀のおしえを奉ずるものは、四つの業垢（けがれ）をはなれ、四つの処に悪をなさず、六つのことに立ち入らない。この十四の悪から遠ざかり、六方を守るのである。四つの業垢とは、殺生と偷盗（ぬすみ）と邪淫と妄語とである。四つの処とは、欲と怒と愚と恐怖とである。

むさぼりと、おそれと、おろかさによって法をおかすものの名誉は、日ごとに消えてゆくものである。あたかも、新月にむかう月のごとくである。むさぼりと、おそれと、おろかさによって、法をおかさないものの名誉は、日ましに輝きをくわえてゆく。あたかも、満月にむかう月のようなものである。

六つのことは、酒を飲んで放縱に流れ、時を外れて街をさまよい、歌舞に遊び、賭博にふけり、悪友に交り、家業をなまけ怠ることである。

青年よ、酒を飲んで、放縱に流れば、富を浪費し、喧嘩口論し、病氣となり、悪評をたてられ、癩（しか）をおこし、羞恥心をうしない、智慧を減退する。

時を外れて街をさまよえば、自分も危険にさらされるばかりでなく、妻子も財産も安全には守られない。犯罪の容疑者にされ、悩みにおそわれ、苦しみにまつられる。

歌舞に遊べば、享楽を追って、はてしがない。

賭博にふければ、勝って怨まれ、敗けては悲しみ、財産を消耗するばかりでなく、朋友には侮蔑さ

れ、縁組することをいやがられ、また、結婚しても妻子を養うことができない。

悪友に交れば、賭博者、大酒者、強欲者、虚偽者、残忍者などの者のみが友となり、仲間となる。なまけ怠るものは、何かにつけて、ことごとに口実をもうけ、寒い熱いといったはなまけ、早い遅い、空腹、満腹といったは怠る。

この六つのことには、いずれも禍がある。

青年よ、友に似て、ほんとうの友でない四種の人がある。それは、貧欲の人と、言葉たくみな人と、へつらう人と、浪費する人である。この四種の人には、真の友とはなりえない。真の友とは、助けになり、苦楽を共にし、忠言を惜しまず、同情ある人である。

青年よ、この四種の友を知って、親しく交われ。賢い人は、正しいおこないによって、日の光のごとくかがやくであろう。

青年よ、ここに六方がある。東方は父母、南方は師、西方は妻子、北方は友人、下方は使用人、上方は修道者である。

子は、父母に仕え、家業をたすけ、遺産を守り、布施を行う。父母は、子に悪をとどめ、善をすすめ、業を学ばせ、嫁を娶り、時いたれば財産を相続させる。このようにして、東方はまもられるのである。

弟子は、師来るとき、座を立てて迎え、うやうやしく給仕し、柔順につかえ、つつましく供養し、うやまうやまて教えをうける。師は弟子を、みずからが修練したように訓練し、みずから得たように得させ、学術を教え、引き立てて名声を得させ、あらゆる面において援護する。このようにして、南方はまもられるのである。

夫は、尊敬と、礼儀と、貞操をもって、妻に接し、家事をまかせ、衣食を給与する。妻は、夫を愛し、秩序よく働き、使用人をあつかう方法をこころえ、貞操であって、夫の収入や財産を無駄づかい

しないで、家事をよくして怠らない。このようにして、西方は、まもられるのである。

友人につかえるには、施与と愛語と、世話と同情とをもってせよ、毒舌をはいてはいけない。友人も、またその友を愛し、放縱にながれるを防ぎ、財産をたすけまもり、心を安んじ、不遇に際しても、その友を捨てず、その妻子をも援助して、友情にむくいる。このようにして、北方はまもられるのである。

主人は、使用人を、その力に応じて使い、食事と給与とをあたえ、珍らしいものはわかち時より休養をあたえねばならない。使用人は、正直に、仕事をよくし、つねに主人の名誉をよろこびつたえるよう心がける。このようにして、下方はまもられる。

修道者に対しては、尊敬の念をもち、行動、言語をつつしみ、喜んで衣食を給せよ。修道者は、その人を教えて、悪を遠ざけ、善をなさしめ、慈心をもって愛憐し、平安の道を説いて、やすらぎをあたえる。このようにして、上方はまもられる。

青年よ、されば、東方は父母、南方は師、西方は妻子、北方は友人、下方は使用人、上方は修道者である。

この六方を、このように心がけて拝み、おこないを正しくし、知恵をあきらめ、謙虚にして、頑迷の心をはなれよ。

業務をはげみ、災厄をおそれず、おこないを清くし、善友に交り、惜しみなく愛し、施与と愛語と世話と同情との四事をおこなえ。

これこそ、真の孝養というべきである。」

青年シンガラカは、仏陀のおしえを聞きながら、ふかく心にきざみこんだ。上気した。青年の顔には、生きるあらたな情熱が、つよくにじみ出ていた。

御十夜の教え



林 隆 碩

本年もお十夜が来しました。農業からは実りの秋、学生からは研究の好期、果実からは柿栗、詩情から申せば虫声の音、氣候から申せば肌寒い風に身の引きしまるときです。

此の時に我が浄土宗にはお十夜の法要を営むのであります。

十夜とてかしこき法の教かな

極楽はいつも月夜に十夜かな

念仏の小寺にあまる十夜かな

阿弥陀仏と十五夜

皆さんの宅の古い過去帳の十五日のところに阿弥陀仏が書かれてあるのであります。人によっては、これは如来様が入滅された命日であると思っているのであります。これ

は大変な間違で如来は無量寿であるから、不滅の仏さんです。しかるに過去帳の十五日に記入されてあるかといえ、四十八願を満足に成就遊ばした成等正覚の記念日であります。他の精霊連は惣て過去の人であるが、如来だけが現在の帳の活仏であることが浄土宗過去帳の特色であります。では、十五日が何故に右様の意味があるのか、これには二つの意味があります。

(一)は三日月、四日月より十月月、十四日月、十五日月と漸次に完満になる。それが如来が一願づつ成就して六八満足に成就なされたのが丁度十五夜の満月に似て居るからであります。これを本願成就身の如来と申します。

(二)この本願満成の如来の光明が十五夜の雲なき満月が宇

宙を遍照する有様と同一であるとの意で、これを光明攝取身と申しています。宗歌としての月影の元祖の詠は必ずしも十五夜に限定する必用もなく、十六夜十七夜でも、あるいは十四日十三日のお月さんでも不可はないでしょうが、どうも十五夜と見た方がびったりするようで、私は小僧の時より十五日のお月さんのことだとして拝しているのです。

十日十夜の経説

無量寿経五惡段の下に「此に於て善を修すること。十日十夜すれば、佗方諸仏の国に於て、善をすること、千歳するに勝れたり」とあります。これが十夜の経説であります。

この穢惡充滿の世界に於いて真の善根の尊いかを教えた名文であります。普通の考えからしますれば人々の間に行われてある善根作福は、名誉とか権勢とかのある不純のもの、の雑つたもので難毒善であるから価値は甚だ低いものであります。真の善となりますと浄土に於いてなした善根よりか幾十倍の価値のあることを教えた銘文です。この事は阿弥陀経にも明かに説かれてあるので、釈迦文仏が此の五濁即ち見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁、劫濁の中に於いて御出世になつて成仏し給うたことは真に至難のことを成就

したのであつて、三世諸仏の称讃に価するものであり、しかも其の上に念仏往生を説いたことは難中の至難をやり遂げたのであつて、讃称する詞がないとあるのがそれであります。

花多い華の中で蓮華が何故に尊いのか、それは泥にも濁にも染まで清浄な華がさき而かもふく郁たる香氣があるからです。善導大師は、衆生貪瞋煩惱中、能生清浄願往生心と仰せられて、貪瞋煩惱と泥濁水と蓮華と願心と比較して往生を称讃なれさたのであります。価値は稀有性にある。

この難修難行の娑婆界に於いて、念仏するほど至大の価値はないのである。これ一念大利無上功体を説き給つたわけであります。

十夜の縁起

今からざつと五百年前、後花園天皇の永享年中、將軍足利義教の執権職、伊勢守平貞経の子に兵衛頭貞国という人があつた。どうしたわけか父子の間が面白くない。その原因は伝えられませんが、父子の間が甘く行かない。かかる上流の家庭でも下下の家庭でも同様であつて、娑婆の荒風が吹きすさんでいる、あさましき人間の有様です。これが此の世の習であります。貞国は早く仏法に歸して真蓮と申

していました。この人にしてこの通りであります。私達によき手本でありますので、貞国は出家の決心で、真如堂に三日お籠りをして三昼夜別時念仏を勤めた。満夜の明け方に剃髪出家しようと思ひ定めていたのですが、五更の夢に、汝出家することは三日待て、次に

心だに立てし誓に叶いなば

世の営はともかくにも

の示告を蒙ったのです。これがお十夜の歌です。心だに立てし誓に叶うとは、念仏だに申されたらの意であります。念仏申すほど仏意に叶うことはないからであります。

此の念仏さえ申されたら、出家在家の世の営はどうでも可いではないかの示歌です。この如来の靈夢に感涙にむせんで居る所へ、父貞経は大和へ隠居して家督を相続して執権職となったのであります。

真如堂の本尊へはお礼詣りとして七日七夜参籠して御仏恩を報謝されたのです。これが我国の十夜縁起であります。

浄土宗と十夜

貞国の縁起あってより約六十年後に後土御門天皇の御宇明応四年浄土宗鎌倉光明寺の観誉祐崇上人は勅命によって、内殿に於いて、阿弥陀経を講じ、且つ真如堂の僧を集めて観誉上人が導師として引声「いんぜい」の弥陀念仏を修し

ました。天皇は痛く感激せられて「願のことがあったら何んでも申せ」とありました。上人は関東光明寺に於いても此の十夜法要をつとめ度い旨を願ひ出でられ、遂に勅許を蒙って浄土宗に行われるようになったのです。推測するに京の真如堂での十夜法要は関東に於いてはあまりに遙かの地であつて単に其の名のみを聞くだけで参詣するなどは絶対に不可能であります。教化を普遍化する謂に於いて、関東に移動さす必用があるのであります。此の宗教的要求上から光明寺開催の勅許を乞われたものであると信じます。さすがは観誉上人は学者にして大宗教家であつたわけですから、かくして関東に十夜法要が遍布するようになり、さては十夜法要は浄土宗の独占になつた感さえする様になりました。それから十夜法要が全日本的にじりじりと普遍しました。が、関西よりも関東の方が盛んであるのは創立的に地理関係がいささかせしめているようであります。かくのごとき十日十夜の法要も世相の変遷と時代の影響によって七日七夜となり、五日五夜となり、三日三夜となり、一日一夜となり、はては単に一夜となつた地方さえもありますが、其の源意を忘れてはならない。要は唯一向に念仏すること、此の念仏を生活に生かすことが本尊靈告の歌意であります。

☆

「本番……ハ―イ」カメラがジーと音をたてて齧を畳み込んで行く。二、三分してやり直し……このやり直しを繰り返すこと四回。二百メートル程の橋の上を二人の騎馬武者が駆けて行く。聞けば関ヶ原の決戦

重ねられたもの



純 誉

場へ馳けつけると云うテーマだそうだ。俳優諸君は額に汗して、監督、助監督の言葉に従って居るが、其処は畜生の悲しさ、馬は橋の途中で止まってしまったっていつかなに動こうとしない。実際映画も百円、百廿円と云う入場料は安くないが、ロケーションはつまらないとばかり人もある。映画はこの

ロケーションやセットの中で俳優と監督とが混然一致した努力の積み重ねられた、云わば血と汗の結晶であると思う時、入場料を云々することは沙汰の限りであると云う可きである。

☆

ローマは一日にしてならずと西洋の諺にあるが、出来上った作品にせよ、或いは城砦にしても、結果的に見て立派な、或いは芸術的価値があればある程、その上つらの結果のみ見ずに、その裏に隠されたというか、醸し出された、蓄積された努力の影を忘れてはならない。戦争前に好く使われた言葉に「一将功成つて万骨枯る」という言葉もあり、「破壊は易く創造は難し」という言葉もあるが、吟味す可き言葉である。

☆

戦後民主主義や自由主義が曲解されて居る向きがあり、新旧思想の衝突があること

を体験もし耳にする。それが正しい民主主義であり人権尊重なら文句はないが、そうでない場合には往々にして長蛇を逸する機会がないとは言えない。上高井戸に惹起した誘拐にしても、マスコミの罪と言う可きか時代思潮がそうさせたか。解釈はいづれにも附く。水は低きに流れ、一つの真理は、何時如何なる場合にも普遍妥当である。女には女の、男には男の使命があり、義務と権利とが附随する。

兎角権利のみを主張し義務が履行されぬ所に思想の衝突もあり、歪められた世相とならざる得ないと思う。

常に我々は行動の前に深い反省とその行動を遂行させる積極性を持った生きかたが必要である。裏腹な気持をすてた処に光明は輝いて来ることと思う。本宗合同の難航に際しての所懐である。

×

×

×

×

×

×

薄地底下の人



戸川 靈 俊

○ 浄土教徒として望ましい日常生活とは？

と問われたら、わたくしには法然上人そのままの生活をたどりなさい と答えるしかしかたがない。そうすれば法然上人そのままには到底なり得なくても、千分の一か万分の一くらいに法然上人に近い人間にはなり得るだろう。

ところで、法然上人のありし行実はどうであったかを一応伝記について尋ねてみる。す

ると、とてもわれわれ凡人には及びもえないものばかりだ。素晴らしい、スケールの大きいというよりも、余りに神性的粉飾につつまれた生き仏そのままの生き方に、われわれはただ頭を垂れて引下ってくるだけだ。とてもわれわれ劣情の輩のまねるところのさわぎではない。

しかし、よく考えてみると、おおよそ宗教者の伝記なぞというものは、聖アウグスチヌスの「告白」におけるような赤裸な自叙伝の

ようなものでない限り、その弟子や信者達が彼を偶像扱いにして、もったいぶって書いたものか、後世の教団が布教伝道の方便として有難づくめでこしらえあげたものかのどれかである。そうした平板なものでは赤裸々な人間性は失われていて、若い人達がトルストイやドストイェフスキーなどの人格にひかれて傾倒してゆくわけにはいかない。敬して遠ざかるか、軽くあしらうかである。

法然上人亦然りで、若い人達に直参してほ

しいと希いながら、理想的人間像として哲学者ほどに文学者ほどに、かれ等に向人氣の湧いてこないのは、大抵そんなところに理由があるのだろう。

そんなときに、伝記から仮構的と思われるものは極力とり除き、神秘的奇蹟的なものは宗教心理学におまかせして、うちにひそんでいる本当のものだけを、力をこめて自分のけい眼で見ぬいてみる。と案外、法然上人という存在は話せる宗教者、人間性ゆたかな、われわれ凡人の近づき易い人格であることが知れよう。

○

法然上人の教化を受けた者は、雲上はさておくとして、関白兼実のような最高の権勢から、大盗耳四郎のような、室津の遊女のような最低の者にいたるまで、殆んど社会の各層にまたがって存在したと伝えられているが、このことは、単に法然上人の教化力が比類なかったからとか、包容力が偉大であったからとかという批評ではすまされない問題だろう。

話し上手の聞き上手でかれ等の悩みを聞き

入れ、適当に慰めの言葉を与えてすましておくだけの、ただの同情者だけでは、かれ等が斯くも心酔すまい。命をなげ出してまで法然上人についてこまい。ここに宗教者法然の人格の秘密があるような気がするのである。

関白兼実を典型とする権勢家群、熊谷直実を代表とする武士群、そのほか耳四郎や遊女友君を代表とする最下底の群れが、法然上人の教化の門に競うて投じたということは、法然上人自身の人格の中に、兼実のような地位の者のもつ権勢欲が、直実のような斗争欲が陰陽師阿波介のように、全裸の女を柱にくくりつけ打擲して酒にふけるサジェストの一面が、また、耳四郎のような殺人強奪の大盗の一面が、そのほか、人間のあらゆる悪徳がこんがらがって存在していたからではないのか。

その悪徳の故に、法然上人は、かれ等に慕われたのではないか。その悪徳でもって、法然上人はがっちりとかれ等をうけとめられたのではないのか。単なる同情者、慈悲者では、とうていできないことなのだ。

もちろん悪徳の面のみでない。善徳の面に

おいて、より秀れたものをもっておられたことは、今更いうまでもなからう。

善も悪もあわせ備えた人間法然。世のあらゆる悪徳を善のそれとともに抱いた大なる全人としての法然上人。これはゲーテについて云われるそれよりも、偉大な全人であったかも知れない。そのような法然上人である。

十悪愚痴の法然房とも、薄地底下の凡夫とも、自らをこのように云っておられる。単なる謙譲の言葉ではあるまい。謙譲ならば偽悪者の言葉だ。善をてらう者が卑しいと同時に、悪をほこる存在もまた軽蔑したくなる。

法然上人の痛烈な自己批判、自己反省の言葉として素直に卒直に受けとればよいではないか。素直に卒直に受けとればこそ、かれ等は法然上人に仲間を見出したのであろう。

もちろん、善人は善なる面で法然上人の会下に参じたであらう。法然上人になついていたであらう。

だが、悪人は、悪徳の面において、法然上人によりかかり導かれていった。

法然上人が完璧無欠の人格であるなら、かれ等悪人はそっぽをむいたにちがいない。遠

い存在として見むきしなかったにちがいない。

悪徳悪業の存在なるが故に、法然上人に心から身を任かせていったを思う。

これが善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら、悪念仏し、ではないのか。

人間が存在するからこそ、悪人があるからこそ宗教は存在する——この意味で宗教の主体は神ではなく、人間しかも、極重の悪人なのだ。極重悪人こそ正機——ここに宗教の特に浄土教の甚深微妙の意味が存在する。

そこで、法然上人の教えに生きる者の日常の実践とは——と問われれば、やはり悪人は悪人ながら、善人は善人ながらである。法然上人と一しよに悪を行じ、善を行じいる。極端に云うなら法然上人と悪業を行じて地獄へつっぱしりと云うよりしかたがない。

浄土教の倫理とは——と開き直ってみても西洋倫理学のような答えは出てこない。悪人ならば悪業を行じて悪人ながらに往生していく——せんじつめれば、それが浄土教徒のモラルというものであろうか。

ただ、ここで注意せねばならぬのは、法然上人が、極重悪業の自身に満足していらなかったということだ。悪業ばかりを拒否されたということだ。悪業の身をなげき悲しまれたということ、すなわち悪業の身を念仏されたということである。

このことは、哲学の始めソクラテースが、賢智に誇る世のソイストに対し、自らは賢智に恵まるること薄き愚者ではあるが、賢智を愛することにおいて賢人にいささかも劣るものでないと絶叫した愛智の起原の故事に、比べられようか。

ラッセルが云ったような神と動物の中間に存在する人間、無限（神）と有限（動物）の間に介在する有限でありながら無限の根を含むところの人間。有限なるものは自己の有限を自覚することなしに自己の現在の地位に満足する。無限亦無限の座に安座していささかの努力も必要と感しない。人間こそ自らの有限を自覚するゆえに無限に至ろうと努力する。その努力の中に無限がひらめく。有限なるが故に無限ということは、神が真の神でなしに有限なる人間こそ神であるということな

扉の御法話

扉の御法語に「出家は……」とありますが、この意味に「出家をするのには」とするのと、「僧侶は」とするのと二通りの読み方があると思います。この御法語は百四十五ヶ条問答に出ていて、多くの問答を集めたものであるところから、その前後には文章が続いていません。従って拝読する者の意味のとり方で違ってくると思いますが、普通には前者の意味に解されています。

そうすると或る人が出家するには経験を積んだ年配者と若いものとは功德が違いうでしょいかと、質問したのに対して、上人は年配者が出家するのはもとより功德の多い事であるが、若い者の出家することは尚のこと優れたことであると教えられたことになります。功德とは善い行いを積み道を修することによって得られることで、いささかつまらない質問のようにみえます。また上人のお答えも、どんな質問にも心からお諭し下さる有難さこそ感じますがただそれだけのようです。

もっとも百四十五ヶ条問答にある質問は何れも些細なことのようにです。例えば女のねたむ心は罪でしようかとか、口をすすがずにお念仏を申してもよいでしようかといった具合です。

こうした種類の問答集ですから、仮りに「出家は……」を「僧侶は」と強いて解す

のだ。

悪業の故に、悪徳の故に念仏する。自己の悪魔性の故にこそ宗教に救われていく。宗いまままで遠かった宗教に目覚めてゆく。法然上人の極重悪業は、こうした意味で尊い。

しいて、今、本当に法然上人の教えのままに、浄土教の倫理を生きぬいている人を求めるならば——勿論、世の道学者的宗教者諸君ではない——死刑囚のような大罪を犯した罪人ではなからうか。

かつて、教誨師のころ六人の死刑囚の最後に立合われた隣寺の老師がおっしゃった——「あの人は心もそっくり、面もそっくり生き仏さまです。刑を宣告された日は狂暴にふるまって手におえなかった人です。どうしてのぼったのでしょうか、房の中を逃げて逃げて高いコンクリートの天井にコウモリのようにへばりついた人です。その人が、冬の日は、ふやかな陽の光に、掌にしらみを遊ばせている。どうして殺さないのかと聞けば、これも与えられた命です。大切な命です。どうして殺ろしなんかできましよう、目を細めてしらみの遊ぶさまを見つめているのです。」

これがどうして人をあやめた恐ろしい大悪人かと、虫けらの命をいとおしむいまの仏心に合掌させられたことでした。台上まで先生お念仏で一しょに歩いて下さいと云うので、称名しながら、ついて上げましたが、最後まで実にしっかりした立派なお念仏でした。あんな仏のように変りきった人を死刑なぞと、惜しまれてなりません」——。

死刑を行われるような極悪業を行ずるのでなければ、救われないという矛盾、極悪業のゆえに自己の仏性に目覚めるという矛盾、矛盾であるが、この矛盾の中に、法然上人の宗教の深い秘義が、秘められていると思う。

最後に、深刻な、彫りのある、生臭い人間臭ふんぶんたる法然上人の生き方でなければ、若い人はついてこない。浄土教の倫理と云ったようなものは時代に生きてこないと思うのである。

(京都にて三五、八、三〇日)

(大阪市立大教授)

×

×

×

るとすれば、実に愉快なお答えとなります。即ち質問は「僧侶は老僧と若輩の僧とでは何れが功德が多いでしょうか」と、何か余程腹でも立つことがあってあえて上人に教えを乞うたということになります。

これに対し普通の人なら「何んといっても年配者は、それだけ優れている」と申すのが当然ですが、上人は「年配者はもとより優れているが、若い者は猶のこと優れている」と答えたことになりました。

こうした後者の解釈は無理だと存じます。しかし上人ならばこのようなお答えをなさるかも知れない気がします。昔からお医者さん坊さんは年配者に限るとい言葉があります。しかし日進月歩というより、がらり一変した医術を身につけた医者は若い人しかありません。

上人は宗教界の革命をなしとげられ方があります。上人はお念仏を授けるためには遊女も盗賊も相手を選ぶことなく、教化されました。まして若い僧徒にかけた期待は大きかったに相異ありません。

この御法語の質問者に「この若僧、何をいうか」という何かの事件があったと仮りに想像しますと、上人の「わかきはなおめでたく」と答えられたお言葉をさてこそと感じます。単に若者をはげまし、若者の価値を認めるといふばかりでなく、いい知れぬ御期待があったと存じます。

御法語を拝して勝手な解説をしたことをお詫びします(村)



近代高僧伝

土川善澂

仏教王国越前を流れる日野川のつくった沖積地から山に入った閑静な地、南条郡神山村

を経て高等学院長に任ぜられたのは大正元年九月であり、翌二年仏教専門学校長となった。

高瀬に善澂が生をうけたのは元治元年九月四日のこと、父を土川善平といい、彼はその四男として生れた。幼にして鋭敏であった善澂は父にともなわれて上洛し、鹿ヶ谷法然院の念譽仏定の門に入って得度、明治十四年には知恩院山内の西部大学林に入り宗余乗を学び、傍ら泉涌寺の佐伯旭雅について性相の学を究め、更に研学の念やむことなく笈を負うて上京し宗学本校に入学華嚴を専攻した。優秀な成績を修めて卒業するや、直ちに第五教区宗学教校長を拝命、後浄土宗大学院講師を

彼は至って弟子思いであり、常に温容をもつて接し、たとえ小僧といえども其の人格を尊重し、品物扱いにすることとはなかった。明治三十六年三月彼の法兄で、美作菩提寺の寺号を再興し、改めて浄土宗所属の官許を得るなど一身を護法のために捧げた武生正覚寺の善譽立峰が示寂し、時に葬儀に随伴した小僧に、或る老僧が無難作にも最上座につらなる善澂に「一寸小僧さんを拝借いたします」というや、彼に「何に、小僧を貸せと、納の小僧は品物でないで、煙草盆やキセ

ルと同等にあつかってもらっては困る。用事があるなら本人がそこにいるから頼むがいい」と申されたという。小僧といえば吹けばとぶように転く見られ、人権など無視されていた時代、小僧も一介の人間であって動物でもなければ、勿論品物でもない。「用事があるなら本人に頼むがいい」という態度のうちに、彼の人徳の一端を偲ぶことができるが、ときに老僧は赤面し、小僧の前に手をついて「小僧さん何卒午後ご導師の伴僧に出てくださいます」と懇請され、師の「出てあげなさい」の語に伴僧をつとめたという。この頃彼は福井の運正寺に住していた。彼が京都清水坂西光寺から転じて此処に董住したのは三十年十月のこと、生来生臭いものを嫌った彼は精進料理で終始したが、中でも豆腐と大根が大の好物で、いつもこれが食前をにぎわしていた。晩酌はたしなまれていたが、さして多い方ではなく、一二本という程度で、それも小杯で一ぱい一ぱい盃を洗っては、長い時間かけて杯を傾けるといふ嗜まれ方であった。又不浄を殊更に嫌った彼は菊を栽培されても肥料は殆んど施されず、従って栽培された菊

もやせ細っていた。そのため「菊も精進と見えて、土川さんに似てヒヨロ長い、やせ菊だ」と、瘦身長軀の彼と対比して批評した人もあったという。それほどに精進を専らとした人であった。

しかし何といっても彼の生命は学問であり、俱舎華嚴も学びはしたが、その造詣は宗学において特に深いものがあった。彼の机上には常に「選択集」がひらかれてあり、キセルをとられても、菊をつくっても、僅かな閑暇さえあれば選択集から目をはなされることはなく、彼の所持された選択集は勿論のこと決疑鈔でも東宗要でも自から精細に書き入れられていた。そして研究をおこたることのなかった彼は、どうすれば難解な宗乗を誰にでもわかってくれることができるかということに心をくだいていた。咄弁で低声な人であったにも拘らず、「土川さんの講義は上手だ、むずかしい宗乗もよくわかる」と学生の間にあっても、又講習会でも好評をとったということとは、不斷の努力のたまもので故なしとはしないのであり、座談にしても諄々として汲めどもつきぬものがあつた。浄土宗人である

以上、卒塔婆に梵字を書くことはよくない。梵字を書くのは密教徒のすることであつて、念仏門の人は南無阿弥陀仏と書くべきであるとされたのも、起立造塔も阿弥陀仏を造立してこそ正行となるという心念からであり、日

課念珠は、肌身はなさず手にしていた。しかも其の念珠は梅の粗末なもので二連もって居り、交互に使用していた。人によっては使い古るされたピカピカしたものを誇らしげに所持しているが、彼はピカピカしているのは手垢がついているからであるとして、手垢がつきさえすれば石鹼で洗い、彼の念珠にはつやがあるということではなかった。珠の立派なものや、ピカピカ光沢のあることは念仏行者の誇りでもなければ、法然上人のご意志でもない。何事も阿弥陀さまのご意志のままに、又法然さまのみ教えによって生活の指針をたてようとするのが彼の考えであり、念仏の生活から逸脱することは殊更におそれていた。晩年彼が多年育英に努力された功績を記念するために、門人たちの手によって、単なる祝賀会ではなしに、後世宗学界に裨益するものをのこしたいという声によって「土川勸学宗学

興隆会」が設けられ、宗典の校合出版が計画され、実施にうつされたというのも、宗乗を命と一生をささげた彼に対する報恩の記念事業としては、誠に好固のものであつたといふべきであらう。

大正八年七月知恩院執事長となり、同十一年三月准司教にすすみ、同年八月推されて知恩院専修道場の上首に就任。司教及び勸学に叙せられたのは十三年二月であり、昭和三年五月には全宗門の興望をにない百万遍知恩寺に晋董し六十八世の法燈をついだが、在住僅かに二年、同五年三月三日六十七歳をもって示寂せられた。命終にのぞみ、病あつしの報に接した宗門は大僧正の位をおくって其の功にむくいたが、全く師は温雅清高、行持嚴正近代稀れに見る学僧であつた。法名を

湛蓮社静誉上人見阿珠光善激大和尚
といい、筑紫善導寺の江藤激英大僧正はその法弟である。

(大 橋 俊 雄)

あさくさ風土記

——谷というよび名——



一瀬直行

又今夜も騒動がおきるのではないかと、
近くの町の人達は不安な目でおびえ、お互
にささやき合っている。

私は昨日の夕方用件があったので、山谷
の電車通りを汨橋まで歩いてみた。一昨日
騒動があったばかりなので、どうなってい
るか多少懸念しながらいったが、格別町
の様相は平常と変わってはいなかった。

所謂問題の焦点となった三階建のコンク

リートの交番、といっても、浅草署山谷警
部補派出所と看板をかかげ、ものものし

い。普通の交番と違って、建物も大きく、

広いが、それ程あたりににらみをきかし、
威圧するかのような感じはうけない。だが

これをうける側の立場、つまりここの住民
にとっては、そう簡単にはうけとれない。

それにしても野暮ったいづくりである。も

う少し自ずと親しみを抱かせるような、明

るい気のきいた建物が出来ないものかと思
う。

丁度夕刻五時をまわったばかりなので、
一同はそろそろ仕事の現場から帰って来る
ところであった。

この辺一帯は、つまり山谷から汨橋にか
け、真中に電車道を挟んで、両側には二百

三十軒程の簡易旅館がたち並んでいる。そ

して身の軽い、その日暮しの人達が、日雇

労働者とか、パタ屋とか、パンパンとか、そのひもとかが、一万人近くも生活しているという。

一同の身なりは暑い時とて、白い開襟シャツに半ズボンや、猿股にまる首シャツ、中にはふんどし一つに半纏を肩にひっかけたりして、種々雑多である。特に薄汚ない姿をしている者は少ない。矢張り二十代から三十前後の威勢のよい若者が多い。その連中にまじって、この年になっても力仕事をやらなければ喰ってゆけない六十の坂をこした老人の姿も目につく。揃って真黒に日やけている。背中いっぱいに入墨をして、凄味をきかせながら行く男があるかと思えば、まるっきり氣力を失ったうつろな表情をして行く者もある。まだ日の高いうちから酒に酔い、ふんどし姿に向う鉢巻で上機嫌の親爺もいる。

一同が帰って来るのは、これから道行く人影もまばらであった。どこの旅館の玄関口も水をうち、閑散であった。入口に置いた朝顔の鉢や金魚鉢をみればのどかであ

る。往來の日かげに鹽を持ち出し、素裸の子供が二三人よって水遊びをしている。焼き鳥屋の店先には西日が照りつけ、往來に背を向けたままのむ客の姿も、まだ見当たらない。あちこちの四つ辻には五六人かたまり、これという話もなさそうだが、顔をよせ合っている。街路樹の根もとには、一人の老人が尻をおろし、ぼんやりと疲れた目であたりを眺めている。一方の軒下には若い女が酒に酔いつぶれ、道ばたに寝ているかと思えば、パタ屋がごみ箱のわきに竹籠をおろし、軒を立てている。なにも今日に限ったことではなく、いつも見なれた町の様子であった。だが、今夜も亦騒動がおきるかもしれないという不安に、近辺の人達はおののいている。商店の主は、これでは商売があがったりだとこぼしている。

この交番が開所したのは、先月の一日であった。ここ一週間程のうちに交番襲撃事件が五回も続けざまにおきている。矢張りこの交番が新しく設けられてからのことである。これまでとて、場所柄交番にいたず

らしたり、いやがらせをしたりしたことはあったが、今度のような大きな規模で、集团的に襲撃するようなことはなかった。

本来働く喜びと意欲をもった真面目な人が多い。だが、中には愚連隊とか、パンパンのひもとか、やみ労働のブローカーとか、暗い過去をもった者とかもいる。全体からみれば一部分にすぎないが、日頃なんらかの権力をもった連中に対し、たとえば役所とか、警察に対し、反抗精神と憎悪を抱いている。そこへもって来て、別に悪いこともしないのに、おれ達をきびしく取り締ろうと、目と鼻の先きに大きな交番をうち建てた。ふざけた真似をするないと、平常鬱積した悪感情が、一度に爆発する。一同には酒が入っている。又大ぜいが暑さのために往來へ涼みに出ている。たまたま警官が酔っ払いを保護したり、喧嘩の相手と連行したりするのをみて、よいきかけとばかりに騒ぎがもち上がる。

そのたびに千人とか、二千人とかの集団的な騒動にふくれ上がり、これではこの先

きどんな事件にまで発展するかもしれないと、一般の不安は深まる一方である。二度目の時であったか、交番の近くで放火事件があった。ところが、かけつけた消防夫を殴りつけ、あげくは投石となって、両者の間に多くの負傷者を出した。そのたびに南千住と雷門との間の都電は運転中止となり、知らずに走って来た自動車の窓硝子はぶちこわされる。そのうちに幾台もの救急車や機動部隊をのせた車のサイレンが、深夜町中に鳴り響く。それを面白がった野次馬が、どこからとなく、ぞろぞろと集って来る。そして騒ぎは一時二時頃まで続く。これでは床につきたくも寝るどころの騒ぎではない。

これというのも、各旅館の主が一せいに十円の値上げをし、その金で大きな交番を建てたために、一層反感をかったのだという。又、安保反対のデモや三池の闘争に刺激をうけたのだという。が、それだけの理由で割り切ることは出来ない。今度の騒動には思想的な背景がないといって、一同を

暴徒とみなし、いっせいに攻撃する。が、それだけの事情で簡単に割り切ることも出来ない。

たびかさなる騒乱にたまりかねた地もとの人達の間では、浄化運動のために、なんとかいう会が、新しく発足したという。各町会に呼びかけ、土地の人達、つまり一同と利害関係をもつ人達の間で、更生のため、町を明るくするために、いっせいに住民は立ち上がったという。無きにまざる程度に終らなければ幸いである。もっと根は深い筈だ。

(童)(心)(仏)(心)

むすんで開いて

くもは、巢にかかった獲物を糸でしばりつけます。しかし、くもの親は、わが子をしばりはしないでしよう。(もっとも子供は、卵から出ると。それこそ「くもの子が散る」ように、それぞれ独立して生活するのだが。)

それでは、あなたのこぶしを、かたく、ぎゅっと握りしめてごらんなさい。痛く

これからは土地の事情に通じ、経験の深い警官を置くという。それもよからう。都あたりで社会保障と福祉事業に積極的のり出すという。それもよからう。が、今日の混迷をきわめた世相を前にして、各自が一人一人よく胸に手をあてて、じっくり考え直すべきではないであろうか。

それはそこに住む人達や近辺に住む人達だけの狭い問題ではない。ともあれ、ドヤ街というような悪名を返上したい。刑期を終えた者が、「おい、谷で又会おうぜ！」というような合い言葉を払底したい。

で、手が熱くなって、爪のあとまでつくでしょう。反対に伸び伸びと掌を開くと、なんとという解放感！

わが子でも同じ事です。行動の隅々にまで親の目を光らせ、盲愛の糸でしばり、子供の活動を親の袋の中にむすびこんでしまふのは、どんなものでしょうか。

開いてあげましょう。放して、じっと遠くから見守る……そうした家庭からは反逆児は生まれません。自分の責任と独立心に富んだ健全な子が、すくすくと伸びるものです。

(輝)

新編 百 喻 經 (8)

二二 飾 粉 屏 風

先日知人を訪れた時、色彩の、余りにも鮮かな、それでいて妙に、古い所もある、中国風な人物画の、二枚折りの屏風があった。

そばへよって見たら、中国式の刺繍だったが、古い物と見えて、所々糸がきれたり糸目が浮いた個所などあり、布地の絹布もだいぶいたんでいたが、そのはげた所を、絵の具で、塗ってあるのだ。

塗らずにおけば、古美術品として、十分の価値があったものを……ワザワザ手数をかけて、真価を失ってしまったが、物が良い物だけに、惜しまれる。浅はかな考えが尊いものを失ってしまった。

二三 イミテーション

一人のスリが、中年婦人の懷中物を、器ると思つた。

用に、黙って貰ってしまった。

ワニ皮のがま口で、先程買物をする時に眼はつけておいて、中味も満足だった。

さて物にして、近くのWCの中で、中味を出して見て、思わず、チエツと叫んだ。

中の札は、その頃よく、松坂屋の横や、日本館の前あたりで、密売していた、裏が五円、一円の札で、表は怪しげな、写真や絵が書かれてあったもので、バラ錢だけがまじめなものだった。残念でした。そう云えば、人間にも外見だけすばらしいのがネ。

二四 意外な結果

蜜蜂を飼育している男があった。花を求めて蜂と同じように、移動して蜜の収獲を挙げるためだ。

「年中花の咲いている所があれば 方々越して歩かなくてもよいのだが……」

彼は考えて、探し求めて、常春の地を探し当て、そこへ移住して——これで落付け

しかし、結果は思い志と反した。なる程、始めのうちは、たしかに年中蜜が得られた。だが、三四年したら、蜜の収獲が減ってきたのだ、それは年中花が咲いてるのに、蜂が蜜を蓄えておく必要がなくなったので余り集めなくなったからだ。

二五 一 挙 兩 損

もと相当に暮していた婦人が、夫を失った後、心の淋しさを××教に誘われて、熱心な信者となり、その道の教えのまま、資産の全部を神様に献げた。しかし運の拓ける様子もなく、財を失い、結局その××教の本部で雑用などして、数年前にその詫しい生涯を終ったが、その頃になって自分の愚かさを悔んでいたと……

(伊東挙位)

×

×

×

×

草木物語^①



——良い事ばかり考えよう——

合 田 微 雪

人間齡経ると、小児にかえると申します。私の両親も多聞に曳れず、若い頃には愛の鞭をきびしく当ててくれましたのに、老境に入ると全然他愛なく、私のやせ腕に、寄りかかっていました。私には、今年大学に入った女子一人しかありませんので、この両親が次々に他界した時には、手中の玉を失うのと、等しい気持でした。

せめてもと、父母の起居していた懐かしい裏の家に、私達親子三人が移り住む様になりましたのが、一昨年の十二月。広くも無いのに、これ迄居た者がいないとなると、何だか空虚で、どの部屋にも父母の面影や遺愛の品々を額げたり並べたりしました。

でも応接間には流石に気がさし、俗名「藤乃」戒名「柴峰院……」の母にゆかりある「富士山図」や紫色の調度を以って、人知れず忍ぶことにしました。

次に庭ですが、これにはハタと困りました。中風でのんびり死んで逝った父に引換え「楢山節考」の作者母堂の様に、ながい間病床に苦しんだ母の看護に、私達夫婦は己というも

のを省みませんでしたので、まして庭の草木など、実に哀れな姿になり果てていました。まだ庭いじりをする程の年齢でも無いなどと、瘦我慢を張ってみても、何とか格構をつけなくては、第一こんな陋屋でも態々訪ねて下さる来客に申し訳がありません。

が、窮すれば通じるとか、早春に庭の擬宝子の芽が出たので、縁側には朝日は射しても、垣根に囲まれた湿気の多い庭故に、これを方々に根分けして置きましたら、四月五月には若い葉がしげり、「これは鮮か」と讃められたのも束の間、秋風の立つ頃には段々と衰え、黄色い葉が地面を這う始末。明る過ぎる炊事場や、また便所の前あたりに、それぞれ夏場に、朝顔夕顔の棚すだれを作りましたが、それもほんの一時的のもの。

この様な庭で、一年中青々としている植物といえば、井戸草と呼ばれている、齒朶の一種が一番。で、それを秋の郊外、山の谿間まで探しに出かけたり、「うちにも生えていました」と、親切な知人が持参されたりで、集まったのが二十六株、お蔭で、齒朶を除き苔のみにした京の西法寺とは逆に、其処此処の

短蔭から、競って緑滴る齒朶が一年中みづみづしく……。買い換えねばと思っていた古い手洗いの蛇口の下から洩れる雫は、算式に受けて、自然草木にそそぐ様にもしました。しみったれたお話ついでに曾って誰かが落して割れたのでしよう、下三分の二だけ残った瀬戸製鉤手洗器の破片を、荒庭の隅に発見し、それに土を埋め蘭を植え、軒端に鉤り下げました。欠けた面など蘭の葉に隠れ、お客様は「何と風変りな形の鉢でしよう」などと。

ブロック流行々々で、まわりの家は殆んど、ブロック塀ばかり。よそと同じでは曲が無い。少々傷んでいても、まだまだ使用可能と経済を考え、茶のベンガラを塗った板垣に、ただ二つの鉢から芽を出した蔦かつらが梅雨前からすでに、殆んど一ぱいに……。

次に、表玄関脇の技折戸を押して、内玄関に至る通路の、古色を帯びた煉瓦塀ぎわの、狭く長い庭の方には、或可く手の掛らない樹木の苗木を植えることにしました。

先ず井戸端には、お眺めの柿の木を一もと。これで「いつでも幽霊が出られます」といえ

ば、お世辞上手の人は、「否、そばの桜の木と袖すれ合って、源氏物語の情緒あり」などと。或る程、桜の咲き散る頃には、楊柿の若葉萌え出た枝が、微風に揺れ「桃山屏風」が忍ばれ、春日の夢に酔う心地、といえは少々オーバーながら。

桜は多くても、この絢爛さには嫌味がないので、他にも数株。やがて二階にとどく垣には、遠くから「桜の家」と眺められそう。といっても、桜はサクラソボの桜という、口の

いやしい考慮も忘れません。他は、健康上、冬日当り良く。夏葉蔭をつくる落葉樹を大部分に。まず、私の好みの紫の木蓮、梅檀、泰山木、また椿、沈丁花等々と並べると、どうも古典趣味であり式張り、肩がこりそうなので、女の子の居る家にふさわしく、紅白の桃もその間あいだに仲間入りさせました。

最後に、私にとって一番大切な、亡き母の名にゆかりある、紫藤を一本、食料難の戦時中、甘い物補給で大いに役立ってくれた、老無花果の樹にからませました。紫といえは夏

場の日除け用にと、ある方からいただいた朝顔が、全部紫でした。わざわざそういう色の花種を選んで下さったのかと、自惚れてお礼を申しましたら、「いいえ、ただ家の朝顔の種の中から分けて上げましたのです」と。処がそこのお家の朝顔は、紫ばかりで無く、

赤・白・コバルト・ピンク等々。妻の老母はホロホロ涙をこぼして「これはきつとお祖母様（私の娘の立場からの呼び名）の魂が、この花に乗り移って『今も斯うして草葉の蔭から見守っているぞよ』と仰しやっている……」と。書いていますこの原稿紙にも私の涙が……。お赦し下さい。いい齡をして、いつ迄も大人気ないこの身と。なに、この様な遇然は何時何処にでもあり、科学的にも実証出来ること、何の不思議も無いのです。

ここに私が樹木に対して、甚だ申訳無い事をした懺悔話の一つ。陽の当らぬ場所に自然に生え、一米位の高さに成長していた枇杷を奥部屋の横に移し植えました。が、素人目にどうも元気無く感じられたので、無考にもポキリと主な枝を折ったところ、意外な弾力のある手答えがしたので、よく見ると、これから

雄々しく、立直ろうとする矢先きなのでした。近所に若い警察官のお住いがあり、その人と或る非行少年との心温まるお話を思出しましたが、この失敗は一昨年初めて植木をいぢり始めた其の当時の事です。然しこの経験はその後植木に接する上に、貴重な試金石となりました。

○

以上、無精者の私に相応しい、一度植えて置けば、あとは余り手数のかからぬものばかりでしたが、縁の床の下から、古いけれど捨て難い植木鉢が次々と出てきて、どれもこれも放っておく訳にはゆかなくなりました。

盆栽といえ、とかく植物をいじめている趣味のものが多く様です。自然の山野に生えていけば、伸び伸びと育っているべき筈の松など、昔の支那女性の纏足の様に、小さい鉢に押し込められ、形も針金等で振じ曲げ、そして大自然の姿を模したなどと。斯く自己流の解釈のもとに、自然の植物あさりから始めたのが、お恥かしい話ですがこれも失敗のもとでした。

それからというものは、旅行をしても暇さ

えあれば、足下の草木に氣をとられ勝ち、「そんな草木の苗が何か薬にでもなりますか？ イヤ科学のご研究？」などと尋問され、返事に窮したり……。

そうして持帰り植木鉢に移しましたが、素人の悲しさ、時候も不適でしたのでしょう。殆んど駄目になり、中にやっと根の附いたのを虎の子の如く大切にしていると、「こんな名も無い植物を勿体ない鉢植えにして」と、まるで狂人扱い。果ては同情され「うちにいい物がありますから」と持って来られたのが大抵熱帯植物。

熱帯植物を育ててみて、はじめて皆様がこれを愛される理由が解りました。水は毎日やる必要も無し、室内に置いた儘でも元気だし、心無き犬が踏みちぎっても、それを他の場所に埋めて置くと、またずんずん伸びて一人前になります。斯うして数も次第にふえ、「生きる力」のたくましさは驚くばかり。

そこで私は、これ等強いサボテンの類や蘭などを沢山鉢植えにして、また特に小さい物はカン詰の空キカンの底に穴を抜いた物にも植え、皆様に分けて上げる事にしました。生

活に勞れ、氣力の衰えをみせている人になどとても喜ばれます。「どうぞこの植物の様に強く生き抜いて下さい」。

○

突然、瀬戸内海に面する、中国地方は山口県の略中央に位する街に住む私の家に、それこそ本当に突然、「大空詩人」永井叔氏の訪れを受けましたのは、今年も梅雨前のある晴れた日の午後でした。

「大空詩人」といえば大抵の方はご存知でしょう。今から三十数年以前から「お互いは大空のように」と書かれた白樺を掛け、マンダリンを奏でながら東京都を始め、日本津々浦々にまで、行脚を続けている哲人、今西行と私は呼んでいます。私も学生時代、東京の街の其処此処で、よく氏の姿を見掛けたものです。ですから、まだ一度も言葉を交した事も無いにも関わらず、まるで十年の知己に会った様な氣持でした。

初対面の挨拶もそこそこ、いきなり手とり招じ上げて、改まって氏から紹介状が差出されましたが、それは或る養護施設からのものでした。（この養護施設は瀬戸内海に浮ぶ

夢の様な仙島と呼ばれる一孤島にあり、其の名「希望の家」お話したい事が多々あり、いづれまた)

私達一家三人は、出来るだけのおもてなしをしようと張り切りました。といつても、格別身分不相応のお金を掛けたりした訳では全然ありません。凡そ来客に対し、法外な饗応をするという事が、どんなに無意味で、また失礼でもあり、更に冷酷ともいえるこの国の古い風習に疑問を抱いている私です。(これに就てもまたいずれ)ただ毎日のテレビ料理等を参考に、栄養本位の、私達が日頃食べている通りのもので、心おきなく我慢をしていただく事にしました。行きずりの橋の下の辺りに、螢と共の野宿かと思えば、一流ホテルに招待されることもある氏にとって、これが何よりだと、私自身で断定を下しました。

○

私は元来、酒も煙草も嗜みません。ただ美しい蟻が面白くて、種々洋酒などを集めておいて、来客に飲んで貰い、それを眺めるのが好きです。が、此度は「私もおんなじです」と云われた氏の言を信じ(庭石の上に並べて

いた貝殻のうち珍種を発見、それを知人に贈り度いと所望し、荷造用の器がビールの空キカンでしたのでオヤ? と思いましたが)酒類も出さず、この機会に、貴重な人生勉強の時間を寸時たりとも空費せぬ事にした。私の我儘を了としていただきました。

酒を以てすれば、誰しも容易に饗応が出来ます。が、酒を利用せずして、それ以上の効果をあげてみたいと思いました。(酒の怖しさに就てもまた)ただ風呂だけはのんびりしていただきたく、家のは旧式故割合に狭くも無いのですが、気分転換にもと近所の温泉の様な銭湯に二人して、出かけました。丁度其の頃、娘も学校の論文を書いている際中でした。

でも、食後にくつろいだ時、愛用のマンドリンを取上げ、さっきの養護施設の歌というのを、唄って聞かされましたが、これは面白いと思いました。

顔見りや嬉しくなるものを

なる程、私も以前は雨の日など、鬱陶しく嫌でしたが、庭に草木を植え出してからというものは、雨の恵みでうるおい、すくすく伸びてゆくのを眺めるのが嬉しく、飼いだに好物を与える時と、同じ思いをする様になりました。

ある掃除も行届き、樹木もきれいに散髪され、鉢植も正しく並べられたお家がありました。家が、大きくはびこった竜舌蘭が、もう小さくなった鉢からはみ出し、非常に窮屈そうなので、それが慈悲の心を説いているお家でもあったし、出過ぎた言葉とは知りつつ、その事を云って、他の地に分け植え、哀れな蘭を自由の身に、させられる様に申しました。

(未完)

×

×

×

×

よい事ばかり考えよう
雨のしとしと降る日でも
濡れて喜ぶ草や木の

合理的ということ



藤 金 正

日本人にとってとかく宗教は、欧米のキリスト教国に比べて、日常生活には縁の薄いものとされています。これは日本人の宗教生活の複雑な一面をよく表わしています。お寺の壇家でありながらも、神社のお祭りともなりますと、みこしをかつぐ氏子であり、年毎に送り迎えする年中行事にしても、正月を神様で迎え、除夜の鐘で煩惱を滅しながら年を送るといった様です。

我国で行われている年中行事は、古代から

主として農耕生活から生れた行事に漁業・養蚕などに関する行事も加わり、それに貴族・武家の行事の影響や、仏教や中国文化の影響といった内外の影響を受けながら、長い歳月の流れのなかに変化を重ねて今日の多彩な行事になったものと思われます。いずれをとってみても、たとえ中国から借用したものであっても長い歳月のうちに完全に日本化されていますので、私達はこうした祖先以来営まれて来た年中行事のなかに素朴な日本人の民族

信仰をほのぼのと感じます。お盆にはお寺の本堂に灯明がともされ、お墓の諸処には石燈籠が明るく祖先の眠る墓地を照らしているなかに、手に手にちょうちんをぶらさげて迎え火、送り火をもっていく風情や、「もういくつ寝るとお正月」の唄に楽しいお正月の夢を描いて人生を味わってきたわけです。

しかしこうした人生の味わいのなかに育ってきた日本人にも、高層建築が林立し、道路には自動車の洪水といった都会には、新しい時代の波がおし寄せてきたようです。お盆でも迎え火・送り火をたく場所とともなく、不幸にして都会の子供達には遊ぶに適當な場所もありません。それに加え商売に利用されてか、クリスマスにもなりますと、都会では街という街の喫茶店や食堂にもクリスマス・ツリーが飾られ、都会というジャングルには大小さまざまな大虎・小虎が出没して、いつ日本はキリスト教国になったのかと錯覚を起しそうです。不信仰の時代といわれながらもいかがわしい新興宗教も結構盛んなようです。こういったなかでは素朴な淡い感傷にも似た日本人独得のものの感じ方、人生の味わ

いも変わってくるのも当然でしょう。

学校の校庭で野球を楽しんでいる子供達が窓ガラスを破った場合、「償弁はいくらしたらしいのか」と悪びれずに云ってくる。我々の時代には頭をペコンと下げて「スミマセン」と一言いったら、あとはうなだれて先方の言葉をまっていたのに時代が変るとそんなものかと噴息している人をたまに見かけます。確かに野球で窓ガラスを破った場合なら兎も角、いたずらをして破った場合でも自分のした行為をあやまるよりも、弁償するといった気持ちの方が先行する程、ソロバンを頭にもった人が現代では増えてきていることは確かかなようです。

第一に合理的・批判的精神が旺盛です。薪を背負いながら本を読んだ二宮尊徳の話などすれば乱視になるのがせきの山と片づけられそうです。宗教に関しても、キリストの復活の話や「天上天下唯我独尊」といったお釈迦さまの話もピンとこないようです。勿論、相手が子供ですので、文学的表現の理解力が不足していることもありましょうが、非常に直観的、直線的で、ジャズ、ロカビリの問題

が世評にのぼったとき、ある高校生は「四十をすぎたオバサマ、オジサマが興奮して歌手にとびついたら、それこそ氣違い沙汰」と逆にパンカラ姿で青春を旺歌した学生時代、少女歌劇に憧れた時代を棚あげにしてと大人の行動に批判を加えて来る程です。また非常に形式を嫌い、権力に対して反撥力が激しいようです。そんなことから苦しい時の神頼みといった宗教には反撥し、自己の良心こそが神であり仏であると信じている高校生が圧倒的に多いようです。

一方「遠い所には、天国と地獄の二つの分れ道があり、そこには神様がいて通る人の心をみるの、嘘をついたり、人にいやがらせをしたり、悪いことをした人はだんだん黒くなって、良いことをしたり、親切にしてあげたり、助けてあげた人の心は白くなって、悪いことも良いこともしない人は灰色をしているの、神様は白や白の多い人をお星さまにしてくれて、悪いことをした黒の多い人は針の山に登らせたり煮え湯に入れたりする。神様は一番偉い神様を太陽にして、だんだんといういろいろな有名な星に分れるの、別に名前がなく

て小さい星は私達のなかの良い人達になるの、こんなことから神様はこわいみたいと思っていました。」といったような末だに幼い「乙女の感傷」から脱していない人もかなりあるようです。

浄土宗のS学園は毎朝授業前に念仏を唱え古くから宗教々育の行われている学校で有名ですが、お念仏に対して生徒達はどんな気持ちで受入れているでしょうか、ある中学生は「私はいつも寝る前に、仏様に私の一生のおねがいと、今日一日の反省とお十念をとええます。もちろん、家の人は誰も知りません。わかったらはずかしいですから。それによってなんとではなく気が楽になるというのか、なんといっているのかよくわかりませんが気が落ち着くともいえます。」一方念仏を唱えても私は空念仏という批判的なある高校の女生徒は「私は宗教というものは信じません。しかし全然無視しているわけではありません。しかし宗教によって悲しみや苦しみがのぞかれると云いますが、そんなことはないと思います。人間というものは苦しみや悲しみを体験してこそ立派な人になれるのに、それを宗教

盲目の女、薬師仏の木像に帰敬し

眼が見える様になった話

奈良の越田の池の南方にある夢原の里（現在の奈良県添上郡辰市村加茂坂の附近）に薬師如来の木像のまつてある一つのお堂がありました。阿倍天皇の御代の頃、その村に両眼とも見えない女が住んでいました。七つになる女の子が一人有り、やもめ暮して此の上なく貧乏な暮しをして居りました。食べる物もなく飢えて死にそうでした。その女は「これはきっと前の世の所業が招くもので、現世の応報だけではなく、未来の世にもこの報が持ちこさるかも知れない。このまま徒に空しく飢え死にするよりは、仏道を行って信心する方が良いだろう。」と考へ、子供に手をひかせて、さきの薬師如来の木像のある御堂に出掛け、仏の像に向つて「自分の命を惜しむのではなのですが、唯この子の命が残念です。このままですと一朝にして二人共死んでしまいま

す。出来ましたらどうか私の眼が見えるようにして下さいませ」と一心にお願いしました。それを見た檀家は哀れに思つて戸を開けて中に入れてやり、像の面に向わせ仏の名を称えて拝礼させてやりました。二日経つて側に居た子供がふと見ますと、その像の胸から桃の脂のような物が出て垂れてゐるではありませんか。子供は直ぐ母親にその事を告げ知らせました。母親はそれを聞き、子供に「それを取つて私の口に入れて頂戴」と頼み、それを食べてみました。するとそれは非常に甘く、そればかりかたちまちにして両眼がみえる様になったと言ふ事です。心から願を發すれば必ずかなえられるものだと言ふ事を知つたという誠に有難いお話です。（日本靈異記より）

（YS記）

によつて救つてもらふといふことは間違つてゐると思ひます。私が全然無視してゐないといふのは、学生々活で一番の苦しみである定期試験の始まる朝、念仏を唱えろと思ひ議になんとかなく心が落着く氣がします……」

一面、合理主義的。批判的で直観的な若い世代にも、その底には素朴な氣持ち、祖先の血が脈々と波打ち、大人が考へている以上に案外、しんがある様です。「親に向つて」などと振舞わずに、若い世代の氣持を汲んで成長を見守つてやりたいものです。

第六回 浄土教学大会

一、期 日 十一月二十二日（火）

二十三日（水）

一、会 場 京都仏教大学

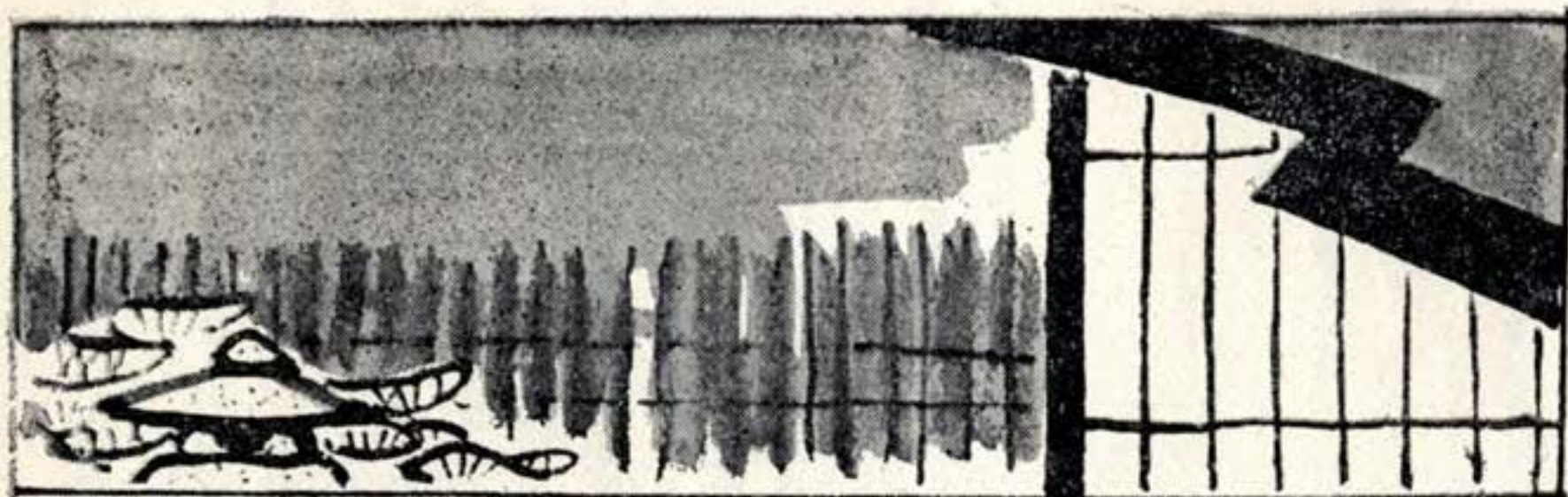
一、個人研究 仏教諸学について

一人二十分

一、申込先 九月末日までに学歴發表

題目、並に要旨（二千字以内）を添えて浄土宗務所内

浄土宗教学院宛



子供の怪我 (上)

村瀬 秀雄

☆

この地方にとって、児童の交通事故は親たちの頭を休ませることのない大問題なのです。往来といえは農道を除いては国道があるだけです、これがまた東海道で、いろいろの自動車の住還は昼夜の別がありません。昼間は乗用車とバス、夜間はトラックが多く、都会のようにゴーストストップの信号機があるわけもなし、文字通り疾駆しています。

ある時この地区で「児童を輪禍から守る」集会が催されるとかで、私に意見を求められたことが

あった。何んでも私が輪禍にあった児童の親の代表だとかいうことでした。そこで小学校の先生が、教育委員会の事務員と一諸に録音機を持って訪ねて来られた。

先生は、一通り録音の趣旨を説明してから「お宅のお子さんは運動会では競走に入賞されましたし、成績も向上してきて、私どもは楽しみにしています」

と、私に嫌な思い出を強いる手前もあってお世辞をいわれました。それでは参考にと、録音の終わった人たちの声を聞かせてくれました。大方は交

通規則の遵守ということで、特に警察の意見としては、学校教育に期待し、児童に要望するものでした。

しかし私の意見は全く違うのでした。国道が狭い、舗補が悪い、自動車が多い、通学する別の道路がない等といかに議論をしても、解決することなし、まして今すぐ間に合うことではありません。また児童はもちろん大人も実に交通規則を守っています。交通信号の完備している東京でさえ二分四十秒毎に一件事故を起しているそうですが、歩道もない国道で規則を守り、自動車を警戒しなければ自分の身が危いわけです。

この地方は交通事故が多いのです。村の中で、命を落した人、手足を不自由にした人、智能が遂に回復しない人、発作的に痴呆となる人、こうして挙げてゆくと、輪禍の恐ろしさは身震する程のものであります。

国道すじの家では、石塀をめぐらすか、石の階段を設けて、自動車が家の中に突入することを防いでいます。深夜に玄関をかじりとられたり、塀を破られたりしたための自己防衛なのです。

Hさんの長男は自動車と石塀に挟まれて即死しました。Kさんは電柱のかげに自動車を避けたのに、電柱と挟まれて即死しました。Mさんは自動車同志の衝突の際に下積になりました。歩道のない国道に安全な所はありません。自殺者は逃げるものを追うようにして殺してゆきます。

いったい、人をみて速度をゆるめる車があるでしょうか。制限速度を守る運転手がいるでしょうか。その上狭い国道で大型トラックから三輪車、二輪車に至るまで、狂ったように馳り追い越し競争をやっています。前に車があれば必ず追い越しの速度競争をします。国道は競技場ではありません。人も往来しているのです。これで事故がなければ、ない方が不思議でしょう。

私は自動車に対する取締りを強化するところが絶対必要です。そして事故を起した運転手は厳罰に処するのです。ところが田舎の警察はどの程度に取締っているのでしょうか。

☆

凡そ以上の意味のことを私は録音しました。私情で申しわけありませんが、私は警察に対して強い不信感をもっています。

今から五年前、末っ子が幼稚園に行っている時分でした。園児と児童は必ずグループで通学し、上級生が指導しています。それがどうしたとか、私の子供は登校途中で、三輪車にはねられました。

この時、警察の係部長が車の所有者に「あれは路上遊戯にしてあげましょうか」と申したそうです。車の所有者は屠殺場、冷蔵業、肉類の卸小売と営み、土地のボスで、自動車も二十台近く持っていました。路上遊戯とは路上で子供が遊んでいる時に、車が事故を起したことで、運転手にはまず責任がないのだそうです。有力なこんな業者と警察官の悪因縁もわからぬではありませんが、その時、車の所有者は二十台も車があつて、事故がある度に一々心配してもいられないと返事したそうです。

こんな子供の怪我を私が知ったのは、私が勤めにゆく途中でした。近所の人たちが手わけして私を探してくれ、幸い自動二輪車にのった青年が私をみつけ、後ろにのせて病院に案内してくれました。

私が病院につくと、玄関から廊下にかけて、近所の人々、役場の助役以下の職員たち、学校の先生たちが心配して見舞いに来

ていました。これは私が以前に町の仕事をしていた関係ですが、こうした人達は私の着くのが早い、子供の息をひきとるのが早い、じりじりして待ってくれたそう、私が病院に着いた時にはホットしたそうです。私は病院の玄関から病室までの廊下につめかけた人たちの顔を一人一人みながら、「すでに子供は死んでいる」と思いました。

しかし病室に入ると、子供の囲りには涙もぬぐわない家人たちが、繃帯の中から僅か出している顔を見守っていました。かすかながら、まだ息があるようです。私はこんな光景をべつとしてから、廊下に出て見舞いの人たちに礼をいい、まっすぐに院長室にゆきました。院長は折からの診察を止めて部屋に入り、私に怪我の程度を説明してくれました。

手足や顔の傷は大したことがなく、頭の怪我が大きかったこと、「陥没骨折」といって、頭蓋骨の右横に、二種ほどの穴があいて、穴の部分の骨片は大腦中に落ち入っていること、大腦を傷けているかどうかは判らないが、相当激しい内出血をしていること等を図解しながら説明してくれました。

た。そして更にいうには人間がどんな大怪我をしても、すぐ「死」には至らないもので、約二時間程度の生命を保った場合は、医者としての診断は「即死」であるのとこのことでした。そして子供の瞳孔は、すでに開いていることも教えてくれた。

そこまで聞くと、急いで院長室を辞し、廊下、玄関の見舞客には帰ってもらい、病室にきて、子供の前に静かに坐りました。

私としては院長から「即死」といわれた以上、子供の息の引きとるのを見守るつもりで家内と一緒に子供の鼻と唇を熟視していました。しかしかげろうよりもっと弱々しい息は、断続しながら続いていました。いつか午もすぎ日が暮れました。

☆

誰かがきて私にささやきました。「運転手を帰してやってよいでしょうか」私は誰が見舞ってくれたかどうか憶えています。事故を起した運転手が、子供を病院につれてきてから引き続いて廊下にいることも知りませんでした。しかしこの言葉を聞くと、私たちはムラムラとして廊下に出てゆき、ボンヤリ立っている運転手らしい人に向って「自分の子供が殺されて、殺した

奴の顔など見たくもない。さっさと帰らないのか」とどなりました。私のこの敢言が後になって問題になったのですが、その時の気持は、ほんとうにそうだったのです。

やがて夜の回診がありました。手足にまだ繃帯は、それをとってみるとなる程大した怪我ではありませんでした。一番しどいのは顔面で三針縫ってありましたが、これすら問題ありません。例の陥没骨折のあたりは、ふっくらもり上っていて、それが全部血液だとのことで、医者は私の手をとって触れさせましたが、ただブヨブヨしているだけでした。

全部回診が終った頃、当直の医者が私を診察室に呼び出して説明してくれました。新刊の外科全書を示しながら、陥没骨折に対する治療方法はなく、今手術を試みれば途端に死なせることで、医者としてはできない、当人の体力を期待して奇蹟的な回復を待つのみである。従って冬眼療法ともいふべく脳活動を起さぬように麻酔薬に似たものを注射してゆく、それと同時に止血薬、強心薬、栄養薬を注射してゆく、その外は安静第一で特に頭部は全く動かさないそして氷で頭部を極力冷やしてゆくより方

法はない、等々のことでした。

氷枕はもちろんのこと、上から氷のうを三つ下げて、頭の全部を覆うように努め、夜通し氷の交換を行いました。

☆

長い夜が明けました。病室の窓が白んでくるのをみて、自分の心まで明るくなる思いでした。しかし二日目の午前に病勢が更に悪化しました。脳の出血で微動もしなかったうちは、まだよかったので、今度は脳膜炎を併発したのです。最初の発作は、ただ泣き声を出した位にしか思えなかったのが、やがては凡そ二時間位おいては発作を起し、「ギャー」と絶叫すると同時に身体は狂わしくもだえます。

発作が始まると、私が両肩を押えつけ、家内と付添看護婦が胴と足を押えつけます。とにかく頭部を安静に動かさないためには、三人とも狂った力に対抗すべく全身の力を込めて押えつけないが、発作の止むのを待ったわけです。もう一つ困ったことは、発作でなくても頭を左右に動かすことでした。その度毎に上からつるした氷のうが頭からはずされます。

その日も朝から多くの方々がお見舞に来

られました。そのため昼間も眠ることができず苦しい思いをしました。が、「ギャー」という叫びが聞えれば発作のしるしですから、折角のお見舞客をすっぱかして病室にかけ戻るわけです。い分と失礼をしました。

お見舞客とどんな挨拶を交わしたか、もとより記憶がありませんが、中で一つだけ忘れられないお見舞がありました。それは「災難と申すより外に言葉もありません。しかしお歸めが肝要です。起きてしまった事故ですから」との意味でした。私の心底は煮えました。親ばかというのでしょうかこの言葉に対する憎悪は一生忘れるものではありません。

二度目の夜がくる頃は、発作が止んでも頭を動かして少しも静かにしません。これでは唯一の療法たる頭を冷すことができません。仕方なく、私と家内は氷のうを手にとって、そのまま頭を冷やし続けました。一寸でも頭から氷のうが離れれば、子供の命もそれまでであるように思われ、必死で氷のうを持ち続けました。

こうして二度目の朝を迎えました。窓がかすかに白んで、四囲はまだ寝静っています。フト気がつくと足が毛布から出ていま

す。それで足を持って直そうとすると、足が冷えきっています。まさかと思い毛布の中に手を差しこんで手首をさぐりますと、やはり冷たくなっています。手から肩、足から膝とさすってみると、同じく冷たくなっています。

☆

私は外に出ました。人通りのない国道を駆けました。一番近い知人の家に行って戸をたたき、知人を起しました。知人の顔を見た時、私は一言も言葉が出ませんでした。しかし知人は私の顔色で、親類等との電報その他のことを依頼にきたと察してくれたようです。「判った、判った、早く帰れ」といつてくれました。また国道を駆け病院にもどりしました。

しかし、どうしたことでしょう、病室に入ると家内が両手で氷のうを持って、子供の額を冷やしていました。家内の目は腐ったように見えますが泣いてはいません。私は恐る恐る子供の手と足に触れました。奇蹟でしょうか、子供は再び温みをとるもどしたようです。私はだまって氷のうを取り、氷の入れかえに病室を出ました。するとさっきの知人がかけ込んできたので、電

報はもう少し延期するように頼みました。

この日の午頃、付添看護婦が辞めました。というより身体が耐えなかったのでしょう。家内の倒れたのもこの日でした。しかし新しい看護婦もきてくれたし、夕刻には家内も戻ってきました。相変らず見舞客がきてくれるし、遠くからの人もありましたが、さすが私ももう応待はできませんでした。

夜の回診が終って、担任の医者が私を呼び出して相談しました。医者としての努力は払ったが、もうこれ以上命をとりとめておく自信がない、万が一の僥倖をたのんで、手術をするかどうかということでした。私は一言の下に「手術をたのむ」といいました。このまま死なすなら、手術の結果で死なしても同じことであると思ったからです。

昏睡状態というより瞳孔の開ききった子供の看病です。心なしか発作を起しても初めて頃の元気はありません。恐らく今夜が最後でしょう。枕もとにいながら、時としては谷底に落ちるような、時としては足が地から離れるような錯覚を感じました。しかし両手に持つ氷のうは額からはず

すまいと苦心しながら、無我夢中で夜を明しました。

いよいよ第四日目です。あと半日すれば手術です。医者や看護婦が何回病室を出入りしたでしょうか。午過ぎ頃、準備室までゆきました。そこで頭髪を剃るのです。私が抱き、一人の看護婦が足を押え、他の看護婦が頭を持って、婦長が剃りました。頭は出血でブヨブヨして軟い上に、頭を動かすので、容易に剃れません。やっと剃り終ってから、折から実施中の手術が終るまで、私は抱いたまま待っていました。

温い子供を抱く最後となるかも知れないと思えば、早く手術室が空いた方がよいのか悪いのか、私にはわけの判らぬ気持でした。

やがて手術室が空きました。婦長の手によつて子供は私の膝から手術室に移されました。手術室の扉がピツタリ閉ざされました。

ああ子供は麻酔をかけずに手術を受けるのです。子供は手術台にのせられました。手に一人、足に一人と二人の看護婦が、しっかり子供を押えています。しばらくすると手術室から発作の時にあ

げた叫び「ギャー」という声が聞かれました。私たち親の、医者たちの、麻酔もかけずに頭蓋骨の大手術を行う惨ぎゃくさに対して、あらんかぎりの声をふりしぼって叫んでいるように思いました。

手術室の前では、親せき等に悲電をとばすことを依頼した知人と私と二人だけで、手に汗をにぎり息をこらして待っていました。

再び「ギャー」という絶叫を聞きました。

知人はフト立って向う側に行きました。私はああまだ生きていると思いました。

(續)

×

×

×

×

×

×

宗祖七百五十年御忌記念
秘仏厄除黒本尊御出開帳記念

増上寺名宝展

▼ 十月十四日～十月十八日

▼ 東京・池袋西武デパート
八階SSSホール

主なる出品物

絵画古書 宋版一切経

元抗州大普寧寺版一切経、高麗海印寺版一切経、二卷伝、三尊来迎図、五百羅漢図、法然上人伝（四十八巻伝）、火車来現図、釈氏源流、黒本尊絵巻、髪續曼荼羅、静寛院宮御書翰、御朱印帳他
黒本尊無量寿如来像、四天王像、
十六羅漢像、釈迦三尊、他

工芸 将軍家鎧櫃、秀忠公のかぶと 他

御朱印入宮、野太刀、縁山志版本

◎ 江戸の発展と共に歩ゆんで来た増上寺が、その所蔵する国宝、重要文化財将軍家関係の秘宝を一堂に集め展覧する。
◎ 檀信徒の方々に、御吹聴、御結縁をおすゝめ下さい。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一力年

金六〇〇円
(送料不要)

浄土 十月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十五年九月廿五日 印刷

昭和三十五年十月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬 秀雄

発行人 佐藤 密雄

印刷人 神谷 秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

発行所 法然上人顕仰会

東京都品川区上大崎一ノ七八二

振替東京八二二八七番

☆☆信仰の歩みを進めるために☆☆

既刊

浄土トラクト

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二〇円二八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. なやみとまよいのもと
3. 信ずるところ
4. 美わしき世界の建設

甦えるいのち

A五版・二十七頁
定価三十円二八円

側々と人の心を打つ失明の体験
文学の世界からみた無常の話
宗教の信仰の遺文にみる
森 赫子
武田 泰淳
佐藤 賢順

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額六〇〇円です。

◇会員には毎月浄土を配布します。

◇この会は皆様の会ですからその発展の為に
お一人でも多くの会員をつくって、正しい
信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利
用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

大正大学教授 竹中 信常 著

宗教儀礼の研究

青山書院刊
A 本文三八〇頁
定価九百円

宗教は実際に生活の上に、実践されなければならない。著者はそれを儀礼の形で体系化した。そのいわんとするところ、信仰と儀礼の一致相即である。

本書は著者が学位請求論文として提出したものをもととして成されたものであり、その内容は次の如くである。宗教宣布信仰実践、法式作法に関心ある方々にひろくおすすめする。

内容

- 序説 宗教儀礼の意味
- 第一編 儀礼の理論……儀礼学説、儀礼発生論、儀礼類型論、儀礼における否定と消極、儀礼変容論、呪術と儀礼
- 第二編 儀礼の様態……祈禱、死の儀礼、物忌と断食、血の儀礼、火の儀礼
- 結論 礼儀と信仰

特価 800円
送料当方負担

ヤスパース著

大正大学講師

峰島 旭雄訳

仏陀と龍樹

理想社刊
B 本文二五〇頁
定価三三〇円

現代西洋の卓越せる哲学者ヤスパースが十年の歳月を費して公けにした論著。西洋哲学の立場から仏教を新しく評価解

東京品川区上大崎一の七八二

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京 八二一八七番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和三十五年九月二十五日印刷 昭和三十五年十月一日発行

浄土

第二十六卷

第十号

定価金五拾円(送料)

日本一の生産・設備

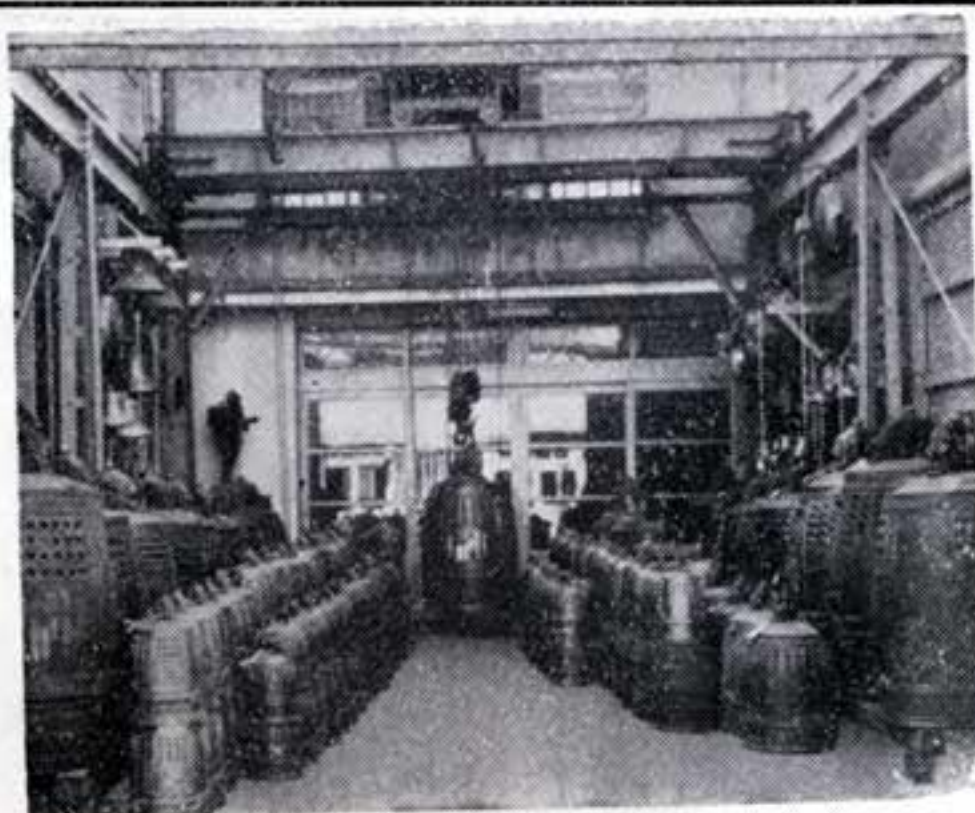
梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪(34) 8847番 本社工場 高岡市横田